第３課　神の召し

【暗唱聖句】

「わたしたちの先祖の神、主はほめたたえられますように。主は、このようにエルサレムの神殿を栄えあるものとする心を王にお与えになり」エズラ記7章 27節

【日曜日・エズラとネヘミヤ】

「エズラは主の律法を研究して実行し、イスラエルに掟と法を教えることに専念した」エズラ記7章 10節

エズラはバビロン捕囚によってバビロンに連れて来られてきたアロンの家系の祭司であり、また書記官でありました。彼は主の律法を研究して実行し、イスラエルに掟と法を教えることに専念してきましたが、アルタクセルクセス王の許可を得て、紀元前458年にエルサレムに帰還したとき、エルサレムでも神様の言葉を教え、ユダヤ人の純粋性を回復しようと努めました。その中で異国の妻たちを追い出すよう命じることさえしました。

　エズラもネヘミヤも自らエルサレムに帰還することを望んだわけですが、それは神様の御心に合致したものでした。神様の御心が私たちの思いと異なることは多いのですが、わたしたちが常に神様と共に歩んでいるなら、神様の御心が私たち自身の思いとなって合致することも少なくないのです。

【月曜日・預言のタイミング】

「バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す」エレミヤ29:10

キュロス王の勅令によって紀元前538年ころエルサレムに帰還した指導者ゼルバベル、紀元前457年にアルタクセルクセス王の時に祭司として帰還したエズラ、そして13年後の紀元前444年にユダヤ州の総督として派遣されたネヘミヤ、すべてが神様のご計画であり、神様の預言と調和し、エレミヤが預言した70年間の捕囚の終わりに呼応しています。またダニエルはエルサレムに帰還したのち、70週が定められているとの預言を受けます。

「お前の民と聖なる都に対して七十週が定められている」ダニエル9：24

70週とは490日、1日を1年とする預言解釈から490年が定められているとの預言です。このときどうなるのかというと、「それが過ぎると逆らいは終わり、罪は封じられ、不義は償われる。とこしえの正義が到来し…最も聖なる者に油が注がれ」（ダニエル9:24）ます。すなわちイエス・キリストの到来と、十字架の預言です。では、いつから数えて490年なのかというと、「エルサレム復興と再建についての御言葉が出されてから油注がれた君の到来まで七週あり、また六十二週あって…六十二週のあと油注がれた者は不当に断たれ…彼は一週の間、多くの者と同盟を固め、半週でいけにえと献げ物を廃止する…」（ダニエル9:25～27）と続きます。エルサレムへの帰還命令はキュロス王のときから数回出されていますが、エルサレムの町を再建するようにとの命令は、紀元前457年のアルタクセルクセス王の時です。つまり、ここが70週の預言の起算点になります。

【火曜日・70週と2300日】

「お前の民と聖なる都に対して七十週が定められている」（ダニエル9：24）という御言葉の、定められているという言葉は、切り取られているという言葉です。何から切り取られているのかというと、8章に出てきます。それは2300の夕と朝です。

「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る」ダニエル書8章 14節

SDAが起こるきっかけとなった聖句ですが、天の聖書があるべき状態に戻るために2300回の夕と朝を繰り返す、つまり2300日、預言的解釈で2300年の時を経てそれが起こるという預言です。先の70週の預言は、この2300の夕と朝の預言から切り取られているわけです。これにより、2300年の夕と朝の預言の起算点も同じ紀元前457年となり、天の聖所があるべき状態に戻るのは1844年となります。なお、当時の再臨運動ではこの日に再臨があると信じていました。

【水曜日・神の選び】

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです」ローマ8:28，29

神様のご計画に従って召された者たちは、すべてのことが益となって働きます。だから、苦難をも喜ぶことができるのです。また、万事が益となるのは御子の姿に似る者と変えられていくからであり、この世で何か良い結果を得るためではありません。御子に似た者となるとき、御子は私たちの長子となります。つまり、御子の兄弟姉妹、同じ父なる神の子となるということです。

「その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いこともしていないのに、「兄は弟に仕えるであろう」とリベカに告げられました。それは、自由な選びによる神の計画が人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるためでした。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです」ローマ9:12，13

神様はご計画を遂行していくために、自由に人を選ばれます。それは生まれる前から決まっていることです。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」とは、神様の特別な働きに就かせたということです。このように神様に似る者となるための神の選びがあり、また神の働きのための選びの2種類の選びがあります。

【木曜日・私たちの責任】

神様は私たちを強制なさいません。神様の選び、召しに対してそれを拒否することもできます。それは神様の救いを拒否することができるのと同じです。しかし、救いの招きに応じたとき喜びと幸せに満たされるように、神様の召しは生きる目的が明確になり、大変ではあってもそこに喜びや幸せを見出すことができるようになります。なぜなら、神様の御手の業が見えるようになるからです。ただ、神様の召しを受け入れても、それを御心の通りに成すことができないことも少なくありません。神様の召しに応えるためには、わたしたちは神様に自分を明け渡す必要があります。

モーセははじめ神様からの召しに対して、「わたしは口が重く、舌の重い者なのです」（出エジプト記4:10）と答えました。自分には無理だと言ったわけです。しかし、そのための担い手としてアロンが与えられ、神様の奇跡に次ぐ奇跡によって、常識ではありえないような、エジプトからの脱出が成功したのです。モーセにも欠点はありましたが、最後まで神様に従いました。